〔研究ノート〕

ウェスタン・ユニオン電信会社における経営と労働の相剋

――アメリカ情報通信産業労使関係史論にむけて――

松　田　裕　之

問題の所在

本稿はウェスタン・ユニオン電信会社（Western Union Telegraph Company：以下，ＷＵ）における経営と労働の概略を記した覚書にすぎないが，同時にアメリカ情報通信産業の労使関係を歴史的視座から分析するための序章部でもある[1)]。

19世紀中頃に登場した電信（electric telegraph[2)]）は，それまでもっぱら輸送に頼っていた長距離間の情報伝達を，電気の力で瞬時に実現する革命的なテクノロジーであった。とりわけ，短符（dot）と長符（dash）の組み合わせによりコード化した文字・数字をパルスに変換して目的地まで伝送する方式は，開発者とされる肖像画家サミュエル・モールスにちなんで現在も電信の代名詞となっている。

いわゆるモールス電信は，広大な北米大陸に分散する小宇宙にすぎなかったコミュニティを有機的に結びつけ，アメリカを統一国家という大宇宙へと変貌させた。就中，南北戦争（1861-1865）を機に西部開拓が急進する過程で，「独占によるサービスの均質化が公益に資する」という通信事業の特性[3)]を拠り所に，乱立する電信会社を統合して産業史上初の全国市場支配を実現したのがＷＵ。爾来，大方の人びとにとって「電報を打つ」ことは，ＷＵの管轄する電信局に足を運ぶことであった。

さて，いま「電報を打つ」と表現した行為は，おおよそ次の手順を踏む。①情報を文書にする→②この文書を短符・長符の組み合わせに置換し，通信回線に入力・送信する→③電送された符号群を受信側が元の文書に復号する→④文書を宛先に配達する。

これらのなかで，①は利用者自身，④は電報配達員（telegraph messenger）によって行われた。文字どおり「電報を打つ」という業務に該当する②と③は，特別な技能を身に付けた専門職者によって遂行される。彼らこそが電信事業の基幹労働者＝モールス電信士

（Morse telegraphers／以下「電信士」）なのだ。

この職業はしかし，電信というテクノロジーの登場によって生を授かった，それ以前に全く類例のない知的技能労働。したがって，「史上初の独占企業＝ＷＵ」と「史上初の専門技能職＝電信士」との相関には，従来のアメリカ労使関係に関する研究が取りあげてきた製造分野の事例[4)]とは，趣を異にする側面も多々見られる。

情報通信技術（Information Communication Technology：ＩＣＴ）が世界を動かす今日，これが意味するところは重要であろう。電信の登場から辿っても，ＩＣＴ分野の発展は日進月歩であり，それを的確に読み解くための有効なコンテクストはいまだに確立していない。ゆえに，この分野のあらゆる局面で日々弛まなく起こる生々流転の正体を掴むには，時宜に応じて行う過去の経験への問いかけ，つまり歴史的なアプローチによる以外方法がないからである[5)]。

Ⅰ　WU の成立と電信士の登場

最初に，モールスの電信創業からＷＵが業界の覇権を握るまでの経緯と，電信士という技能職の裾野が形成された事情を眺めておく。

⑴　電信トラストの成立

ヨーロッパでの絵画修業から帰国する船上で，モールスが電気エネルギーによる新たな通信方式の発想を得たのは1832年10月29日のこと。その５年後，彼は美術教員として勤務するニューヨーク大学で自らの手になる電信機のデモンストレーションを行う。それに感銘を受けた鉄工所の御曹司アルフレッド・ヴェイルは，その場でモールスに技術協力と財務支援を申し出た。

これ以降の開発過程は，まさにヴェイルの独壇場。短符と長符を組み合わせた文字・数字のコード化方式は，何を隠そう，彼の創意工夫の賜物にほかならない。後世これがヴェイル・コードではなくモールス・コードの名で伝えられるのは，ひとえに「新型通信の開発にかかわる全ての成果はモールスの名義に属し，ヴェイルはそれがもたらす収益の四分の一を受け取る」という契約による[6)]。

運命の出会いから幾多の苦難を経て，1844年５月24日にモールスとヴェイルはアメリカ最初の鉄道会社であるボルチモア・アンド・オハイオ鉄道の軌道用地沿い32キロメートルに電線を架設し，ボルチモア⇔ワシントン間での通信実験を挙行した。

真鍮と木板で製作した短符と長符を打電する装置＝電鍵を使って，ふたりがワシントン最高裁判所とボルチモアのマウントクレア駅のあいだで送受したのは「神の御業なり

（What hath God Wrought）」という旧約聖書の一節。これが人類史上初のデジタル通信[7]が産声をあげた瞬間であり，やがて世界をリードするアメリカの電気通信事業がスタートを切った瞬間でもあった[8]。

1845年５月15日，モールスは電信事業の将来性を確信して野に下った郵政長官エーモス・ケンドールらの協力を得て，資本金６万ドルでマグネチック電信会社を設立する。同社はニューヨーク⇔フィラデルフィア，フィラデルフィア⇔ボルチモアに電線路を敷設，政府管轄下にあったワシントン⇔ボルチモア線の払い下げも受けて，事業発展の基盤を確立した。

これを機に，1850年代に入ると北東部諸州で活動する実業家たちが相次いで電信事業に参入，独自の電線路を開設する。やがて1856年４月，ロイヤル・ハウスの印刷電信特許[9]を買収したハイラム・シブレーのイニシアティヴのもと，65件の独立系電信会社を合同吸収してＷＵが創設された。同社はその名のとおり北東部から西部に拠点を置き，東部の雄アメリカン電信会社に対抗して，電信市場の覇権争いにしのぎを削る[10]。

決定的な転機となったのは南北戦争である。アメリカを南北に分裂させた未曾有の内乱は，北部から南部に電線路をもつアメリカン社には逆風となり，東部から西部に路線を拡張したＷＵには追い風となった。

ＷＵは総支配人アンソン・ステガーがその卓抜した暗号通信法の才を北部連邦政府に認められて陸軍電信隊総監を拝命，軍用電信網の敷設・管理・運営の一切を任された[11]ことに乗じて，戦争の進展とともに経営が不安定となった他企業の買収を進め，業界全体に対する支配力を高めていく。

戦死者50万人を超える内乱が終結した1865年，ＷＵは北部連邦の勝利に対する功を賞されて「政商」ともいうべき地位を獲得，戦時中に敷設した軍用電信網の払い下げを受けた。かたやアメリカン社もまた軍用電信網の払い下げによって勢力を回復したものの，ＷＵが1866年２月に業界三位のユナイテッド・ステーツ電信会社を買収するに及んで，合併か競争継続かの選択に迫られる。同年６月12日，アメリカン社が合併契約に応じた結果，ＷＵは総資産額41,063,100ドルを誇るアメリカ産業史上初の超大型事業体となった。

それ以降，ＷＵは独立系電信会社の買収をつうじて北東部から中西部の主要都市に管轄局を開設していく。やがてアソシエーティッド・プレス（ＡＰ）やロイターなど国内外の通信社とのあいだに保有電信網の使用に関する独占契約を締結，報道メディアをも掌中に収めた結果，アメリカ電信市場に絶対的な地位を築いたのである[12]。

⑵　情報通信技能職の誕生

さて，電信網の拡張にともない電信局も全米各地に開設されたが，そこでモールス符号による元文書の符号化（coding）と復号化（decoding）を行ったのが電信士。留意すべきは，電信創業時点において電信士がいまだ一個の職業としては存在していなかった，という点であろう。

最初期の電信士はモールスら事業関係者やその親類縁者にほかならず，彼らが別の身内や知人にモールス符号の送受技能を伝授することで，電信士の裾野を拡げていった。こうした徒弟制（apprenticeship）こそが，電信創業期から一貫して広範に行われた最もポピュラーな電信士の養成方法なのだ。

たとえば，鉄道会社は各駅を電信で結んで列車運行の管制システムとしたが[13]，未開拓地の残る中西部や南部の地方都市に設けられた鉄道駅の大半は昼・夜・深夜の３交代勤務制を採用し，各シフトの電信士が構内業務全般を切り盛りしていた。

そんな彼らのあいだでは，自分の息子や娘に電信機の操作や電気器具の保守を含む鉄道駅の運営全般を伝授するのが慣行であった。ミズーリ州に路線をもつフリスコ鉄道に勤務したファーロン・アトキンズは，「私は電信と一緒に大人になった。私の父は電信士で，母にはふたりの妹がいたが，そのうちのひとりはやはり電信士と結婚した。私の祖父も電信士で，鉄道事故で死んだ。そのあと祖母は別の電信士と再婚した。家族全員で３交代勤務に就いたこともある。祖母の兄弟や姉妹は自分が電信士となるか，それとも電信士と結婚している。電信はいうなれば私たちの家業なのだ[14]」と述べている。

対照的に，北東部諸州の都市部で営業する電信局は，13～15歳の少年や少女を，送信側の顧客から預かった元文書を電信士に渡したり，電信士がモールス符号から元文書に書き直した通知票＝電報を受信側の顧客に届けたりする電報配達員として雇用した。小遣い銭程度の低賃金で済む経済性と，あり余る体力とを見込まれての措置である。

鉄鋼王アンドルー・カーネギーは，電報配達員として働いた少年時代を次のように振り返る。「電報配達員は，毎朝，電信室の掃除をしなければならなかったので，電信士たちが来る前に電信機を使って打電の練習をする時間があった。私はすぐに電鍵を操作して，私と同じような目的で機械をいじっている他局の連中と通信を始めたものだ[15]」と。

この言葉からうかがえるように，創業当初の電信局では，電報配達員が電信士の入り口職務（entry-job）としての役割を果たしていた。彼らが文書運搬業務のかたわら電信士の技能を盗み取り，開局前や閉局後に電鍵や受信機に触れて，モールス符号の打電・解読法の練習に励む。

「技を盗む」という表現は職人修行を連想させるが，そもそも電信システムを機能させ

るには，打鍵による迅速で正確な符号化と，やはり迅速かつ正確な元文書への復号化の鍛練が不可欠。「ベテランの肘こそが最高の教師（the only proper place to learn telegraphy is at the elbow of an experienced operator[16]）」という格言もあり，自立を夢見る若者たちは先輩電信士の一挙手一投足を熱心に見守ったことであろう。

1861年10月，北米大陸を横断する電線路（Transcontinental Telegraph Line）が開通した結果，太平・大西両洋間での情報交換に要する時間は「日」から「分」へ縮まった。あたかも19世紀半ばのアメリカは，電信や鉄道に象徴される如く機械文明のルネサンス期に突入しており，先端テクノロジーに対する憧憬の念が青少年のあいだに高まっていく。

とりわけ17世紀半ばにアメリカ東海岸に入植して以来，アメリカ開拓のイニシアティヴを握ったイギリス移民やスコットランド移民，あるいは母国において長らく彼らの支配下に置かれてきたアイルランド移民の若者たちは，他の人種・民族よりも優れた英語の読み書き能力を，元文書の符号化・復号化を旨とする新種の職域に活かして立身を遂げようと考えた。

電報配達員から電信士となり，その有能さを見込まれてペンシルヴァニア鉄道にスカウトされたカーネギーは，そこで次のような電信士養成法を実施している。曰く，「各駅の電信局に女性を見習として配置し，必要に応じて局の管理を任せた。こうして養成された女性のなかには私の従妹もいた。彼女はピッツバーグ貨物駅の電信士となり，若い人たちを次々と養成したので，そこはまるで電信士の学校と化したかのようだった[17]」と。

このように，自立や立身を夢見る少年少女を予備軍として，「門前の小僧」よろしく「習わぬ経を詠む」機会を日々の仕事に密着したかたちで提供していく方式は，新種の技能職従事者の豊かな供給源を作るうえで，ことのほか効率的なものであったといえよう。

II　WU 独占体制下の経営と労働

ここでは，電信業界を支配するＷＵと電信事業の基幹労働者たる電信士の特性を，事業管理組織と労務支配の実態，電信士の労働生活，労働運動の生成，経営支配体制の変化という点からあきらかにしていく。

⑴　ＷＵの事業組織と労務管理

前途洋々たる業界の覇者ＷＵに集った経営者たちは，まず，北米大陸に拡がる電線路を効率的に管理運営する事業組織の構築に着手した。その際に，彼らが拠り所としたのは，南北戦争期に連邦陸軍が作りあげたライン＝スタッフ型の軍隊組織である。じつは取締役会を頂点とするＷＵ経営層は，かつてＡ・ステガーが率いた陸軍電信隊のＯＢ会にほかな

らなかった。[18]

総司令部にあたるＷＵの本社は，社長，財務担当取締役，３～５名の副社長で構成される経営委員会（executive committee）を最高意思決定機関として備え，多数の法律スタッフや電気技師と呼ばれる研究開発スタッフ，２件の機材製造工場の監督者を擁していた。

そのもとに，東部・南部・中央部・太平洋岸部という４つの営業地域（regional divisions）を設け，各地域に総支配人（general superintendent）を配置し，下部単位たる33の営業地区を管理させる。軍隊組織に照らすと，総支配人は各方面軍司令官に相当した。

ついで，総支配人の配下に地区支配人（district superintendent）を置き，各地区にある総計3,219件の電信局を管理させる。部隊指揮官にあたる地区支配人は，修理・保守主任，監査役，購買代理人をスタッフに抱えた。

電信事業の最前線基地たる各電信局を管理するのは電信局長（manager)。彼らは下士官にあたり，毎月一日，地区支配人に対して送受信件数，総受領額，業務が行われた局毎の電報受領額，電報が交換された全局での総受領額，他社電線の使用による受領額と支払額，総経費の明細を記した報告書の提出を義務付けられた。[19]

このように，ＷＵが軍隊に倣って事業組織を体系化していくなかで，電信局は本社電信運用部門の管轄下に置かれ，電信士には軍規を範とした就業規則が課せられる。以下，1866年制定の『ＷＵ就業規則』から主たる項目を抜粋する。[20]

①電信運用部門に雇用された人員は，規則に従って，業務の迅速な処理に最も適切と判断された労働時間・食事時間に服すること。

②１名以上の電信士が勤務する局の食事時間は，その時間中に少なくとも局員の半分が待機しているように設定すること。業務時間中，電信士不在の状態を作らぬこと。

③営業区支配人からの許可なしに欠勤せぬこと。

④新米電信士と一緒に仕事をする際，ゆっくりと簡潔に電文を送信し，それがきちんと受信されたかどうかを確かめること。

⑤電信士は１本の回線あるいは１台の機器に専念して働くことはない。必要な場合や特別な任務に従事していないときには，あらゆる機器や回線で送受信作業を行うこと。

⑥全通信文は可及的速やかに送信すること。いかなる省略も行ってはならず，ピリオドやその他の句読点をもちいる場合，原文のまま正確に送信すること。

⑦電信士はいかなる場合も，回線を介して，あるいは電信局内で，不敬な言葉，卑猥な言葉，その他の非紳士的な言葉を使用しないこと。

⑧運営部門に直接関係のない人間を室内に入れないこと。電信士はこの規則を厳格に守るべきこと。局内に友人を招くなど言語道断。全通信文の守秘を保つこと。

⑨受信側の電信士は通信文のあらゆる誤りに責任を負うこと。電信士は細心の注意を必要とし，疑わしき場合は，正確を期すために全力を傾けること。

このような軍隊仕様の厳格な規則を，日常業務のなかで電信士に遵守させるべく，業務監督（supervisors）という作業監視職も導入された。

もとより電信士のパフォーマンスの良否は，文書を送受しているその時をとらえて判定するよりほかなく，逆にその機を逸しては不可能となる。よって，公正な点検を行うために，業務点検室（observing room）が電信士の視界からは隠れた場所に設置された。

そこには，局内の全ての電鍵と受信機に接続された回線が集められ，業務監督はそれらを介して各電信士が打電・受信するパルスを傍受し，作業ミスやミスにつながりかねない誤り，決められた送受信手続きからの逸脱，時間の浪費などを詳細に記録する。あわせて各電信士の出勤状況ならびに勤務時間，文書の送受総数，時間当たりの送受数も記録し，それらを総合して電信士の昇給・昇進のデータとしたのである[21]。

⑵　電信士のワーキング・スタイル

ＷＵが軍隊組織を範として構築した中央集権的な事業管理組織と厳格な職場規律のもとで，電信士は近代的大企業に勤務するホワイトカラー系の専門技能型従業員となった。実際，ＷＵ管轄局に勤める電信士の多くは，当時の都市労働者の大半を占めたブルーカラー系の工場労働者とは一線を画した存在であることを強調すべく，背広にネクタイ，磨きあげた靴という出立ちで，自宅近くの電信局に毎日颯爽と通勤した[22]。

電信士に人気があった雑誌『オペレーター』1883年７月16日号は，速記，金儲けの秘訣，恋愛の神秘，占い，顕微鏡写真，独身者への助言，文房具，礼儀作法，手紙用例，カード遊び，手品のタネ，ダンスなどに関する記事や付録を満載し，中産層の一員として恥ずかしくない教養と所作を身に付けたいと切望する，とりわけ若者層に狙いを定めた内容となっている[23]。

そんな彼らの目標は，二級電信士（月給10～60ドル)→私信担当の一級電信士～ビジネス・報道担当の一級電信士（月給60～100ドル)→主任電信士（月給75～100ドル)→[局長補佐]→局長（月給100～150ドル）という昇進経路を順調に上昇し，年収1,000～1,200ドルを稼ぐ中産層の仲間入りをすることであった[24]。

ところで，ＷＵは主要回線が走る北東部・中部太平洋岸に管轄局を集中的に開設する都市部重視型の営業政策を採用，逆に支線が走る中西部や南部あるいは極西部では，設備投資費を可能な限り節約しようと鉄道駅の管制局に業務代行を委託していく[25]。その結果，1869年の大陸横断鉄道開通によって鉄道網の拡張が続くなか，電信士には「鉄道駅を訪ね

歩けば必ずどこかで仕事にありつける」という状況も生まれた。

電信技能が優秀である反面，職場規律に唯々諾々と服することを嫌う若者は，この状況を利用して，職場を転々と変えながら人間関係に煩わされぬ気儘な人生を選択する[26)]。発明王トーマス・エジソンの青少年期はまさにその典型であった。マウント・クレメンス駅で新聞の売り子をしていた1862年夏，彼は駅長ジェームズ・マッケンジーから３カ月間にわたり電信技能の手ほどきを受ける。翌年からこの技能で生活の糧を得ながら，機械発明の腕を磨く放浪の旅を続け，電信機の改良に関する特許権の取得を皮切りに数多の発明品を世に送り出した。

そんな電鍵無宿とでも呼ぶべき職業生活のスタイルには，専門技能に磨きを掛けて，より良い処遇を求めながら企業を頻々と渡り歩くフリーランスの情報通信系技能者の原型を求めることもできよう。

ついでながら，ＷＵ管轄局に勤務する電信士は自分たちの扱うビジネス・報道・政治関係の通信文こそ電信事業において最優先されるべきであると主張，地方の鉄道駅に勤務する電信士がしばしば通信の流れを滞らせると憤慨した。

かたや鉄道電信士はワンマン勤務体制のもとで，鉄道本部から送信された指令を列車乗員に伝達し，線路の切り換え装置や信号機の操作・点検なども行い，悪天候や事故によって列車の運行に乱れが生じると，復旧するまで延々と勤務し続けねばならない。

したがって，鉄道電信士にとって通信文の送受業務は，公用・私用の別を問わず，列車の円滑な運行を保証し，乗客・貨物の安全を守る業務の一部にすぎない。彼らの眼には，勤務時間中狭いデスクに腰掛けて，電鍵をひたすら叩く企業勤めの電信士が「お上品な雇われ人（kid-gloved laborers）」としか映らなかったであろう[27)]。

ただし，留意すべきは，ひとりの電信士がそのキャリアにおいて，ある時期はＷＵ管轄局に勤め，またある時期には鉄道駅に勤めることもある，という事実だ。ＷＵ管轄局の従業員として働いていた電信士がなんらかのトラブルを起こして職場を去り，電鍵無宿の渡世に入ることもあったし，逆に鉄道駅を転々としていた電信士がＷＵ管轄局に腰を落ち着けて長期勤続する場合もあった。流動的なワーキング・スタイルもまた，電信士という技能職の大きな特徴となっていたのである。

⑶　電信士の労働運動

業界支配が完成した1860年代半ば以降，ＷＵは大陸横断電線路を幹線として南北にも電信網を伸長し，事業規模を急速に拡大していく。それに必要な資金を捻出すべくＷＵが人件費の削減に血道をあげた結果，作業現場では労働時間の延長や賃金水準の低下が次第に

露わとなった。

南北戦争中の1863年秋，中西部戦線における通信拠点オハイオ州シンシナティのＷＵ管轄局に勤務したジョージ・キーナンは「きわめて不規則な長時間勤務が電信士の士気と健康を損ねていた」とのちに回想している[28)]。

この時期，北部連邦の民間局に勤務する電信士は全員が２交代制のもとに置かれて，第一シフトの勤務時間は午前８時から午後６時まで，第二シフトは午後６時から通信文の全てを処理するまで，となっていた。

けれども，現実には，業務量が各シフトの処理能力を凌駕し，とくにヴァージニアから南西部にかけての戦線では，ＡＰ通信の特別電報や軍関係の暗号電報が殺到，電信士は夜を徹して働き詰めに働かなければならなかった。「３日間で眠れる時間といえば，どんなにかき集めても10時間程度にしかならなかった」とキーナンはいう[29)]。

それでは，このような過酷な業務に対して支給される給与額はというと，せいぜい月70～90ドルが相場。その後，電信士の不足も手伝って90～110ドルに上昇したが，じつは戦時期の1864年まで発行されていた新札１ドルを平時紙幣に換算すると40セント程度の価値しかない。

もっとも，民間電信士の給与額とて，電信隊配属の電信士と比較すればまだ「まし」であった。彼ら従軍電信士の給与額は，主任が60～70ドル，副電信士では40～60ドルにすぎない。ために，1862年12月，ポトマック流域軍配属の従軍電信士50名が連名で増給を求める嘆願書をステガー電信総監に提出したほどである[30)]。

こうした事情に促されて，電信士のあいだにも「同じ境遇の労働者として一致団結し，自らの置かれた不当な状態を改善していくべし」という気運が生じた。1863年11月，ＷＵニューヨーク本局勤務の電信士たちが呼び掛けて，全国労組の結成にむけた規約作成のための会議を開催し，以下の宣言を採択する。

> 「我ら電信士は，相互支援のために団結し，自らの職業の内容と地位を高め，労使のあいだに有益で協調的な関係を築き，互いの利益を増進し，労使の利害が一致するという原理を認める。そして，この原理のうえに築く労働組合が，我々だけでなく，我々の使用者にも等しく利益をもたらすということを確信する[31)]」

これをもとに結成されたのが，全国電信士労働組合（National Telegraphic Union：以下，ＮＴＵ)。規約には，年６ドルの組合費，男性電信士のみを組織対象とすること，疾病・災害により労働不能となった組合員に週６ドルの補償金を提供すること，失業中の組合員には生活補償金を給付することなどが盛り込まれていた。

1864年９月５日に開催された第一回年次総会（ペンシルヴァニア州フィラデルフィア）

の20日後，機関紙『ザ・テレグラファー』が創刊される。その表紙には「崇高なる偉業ではないか。知性は時間を制覇した」との言葉が掲げられた。

創刊号において編集長ルイス・スミスは，ＮＴＵの目標を，「電信士のレベルを道徳的にも科学的にも向上させる」ことと明言する。これに対して，組合員からは「電信各社に対して我々の要求をはっきりと突き付けるべし」という意見も寄せられた。

だが，スミスは「ストライキが必ずしも目的達成に有効であるとは限らず，どちらかといえば知性を欠く輩がもちいる力押しの手段であり，我らが労組に集う人びとには似つかわしくない」と回答し，強硬な意見を諫めた。そこには，最先端テクノロジーを扱う知的技能者たる電信士が抱いた「我は余人を以て代え難い存在なり」というエリート意識が見え隠れしている[32]。

詰まるところ，ＮＴＵとは上記宣言に示されたとおり，労使協調を前面に押し出した，至極穏健な互助組織にほかならなかった。それゆえに，人事処遇や労働環境の積極的な改善を唱える組合員にとっては，不満の残る組織ともなったのである。

⑷　強権型経営者の登場

1873年９月に始まる長期不況[33]のもとで，ＷＵは利益率の低下を補うべく，自動通信機と多重電信システムの導入に本腰を入れた。

前者はあらかじめ文字・数字を穿孔配列に直して紙テープに記録しておき，これを高速のテープ読取機にとおすことでパルスへと変換・送信する装置であった。標準的な電信士による入力速度は，１語６文字として毎分25～40語。これに対して，自動通信機は毎分1,000語以上の送信を可能にした[34]。ただし，穿孔作業に要する時間は，電鍵による打電とさほど変わらないために，重要な演説の全文送信などの用途に限られた。

後者は回線容量の増大をめざしたものだ。まず，送信側と受信側にふたつずつの電鍵を置き，ひとつの電鍵によって弱電流を，もうひとつの電鍵によって強電流を各々相手方に送信できる回路を組む。ついで，電鍵と受信機をおのおの継電器に接続，送信側で電鍵を叩くと，受信側の継電器だけが作動するように回路を組む。この両回路を合体させると，１本の電線で４件の電文を同時に送受できる四重電信システムが完成する[35]。電線は電信設備のなかで最も高価なアイテムであり，四重電信による節約効果はまことに大きかった。

ＷＵは，これらイノヴェーションを採用していく一方で，電信士を大幅に増員する人海戦術も推進した。むろんこの措置は人件費の増加を招くが，同社はそれを相殺すべく1876年に社長以下全従業員の給与削減と物価連動式賃金体系の導入を発表している[36]。

かくして，電信士の労働条件は悪化の一途を辿った。人海戦術は名目賃金額の低下を，

また作業現場での飽くなき労働強化は物価高騰ともあいまって実質賃金額の低下をもたらし，最終的には二重の損失というかたちで電信士の生活を圧迫する。

折しも「電信事業は金のなる木だ」とばかりに，その支配に乗り出したのが「ウォール街のメフィストフェレス」ジェイ・グールド。この姦雄は強引かつ巧妙な手口で，業界最大手WUの乗っ取りをもくろんだ。

まず，自身の支配する鉄道の電信子会社アトランティック・アンド・パシフィック電信会社を使って，WUに圧力を掛けた。ユニオン・パシフィック鉄道を買収し，同社がWUと締結していた契約を破棄したのを手はじめに，ボルチモア・アンド・オハイオ鉄道などの電信子会社と新たな契約を結び，アタランティック社の事業規模を拡大していく。

さらに，中南米への電線路を保有するインターナショナル・オーシャン電信会社の支配権を獲得して，自身の電線路を拡張することでWUを威嚇。そのうえで，1878年にアトランティック社をWUに「言い値」で買い取らせた。

翌1879年，グールドはアメリカン・ユニオン電信会社を設立，自身が支配していた南西部の鉄道電信会社とのあいだに契約を結ばせる。あわせてボルチモア・アンド・オハイオ鉄道との同盟契約も更新，カナダのドミニオン電信会社を買収するとともに，新たな大西洋横断海底ケーブルの建設計画を発表した。

まさに息もつかせぬ揺さぶりの前に，WU株が暴落するや，グールドは「ここぞ！」とばかりにこれを大量取得して一躍同社の最大株主となる。そして，その地位を利用し，今度はアメリカン・ユニオン社の株価を適当に吊上げたうえで，WUに買い取らせた。

余勢を駆ったグールドは，有力な競合企業であるボルチモア・アンド・オハイオ鉄道系列の電信子会社とポスタル電信会社をも傘下に収め，瞬く間に電信業界の首領へと昇り詰める。[37)]

1881年，WUの完全な支配権を握ったグールドは，かねてから子飼いとしてきた同社総支配人トーマス・エッカートに事業運営の一切を委ねた。南北戦争時，リンカーン大統領直属の陸軍省電信本部長を務めていたエッカートは，その地位を利用して金取引を左右する機密情報を密かにグールドへ流したこともある。

グールドのもとで引き続き総支配人を拝命したエッカートは，ニューヨーク・シティ本社に事業経営の全権限を集中，グールドの意向を全社レベルで反映させる集権的管理体制を一層強化していく。

電信士たちは「電線と鉄道に巣食う魔物」に喩えられたグールドに言い知れぬ恐怖を覚えた。そもそも電信士に役得があるとすれば，それは何よりも，アメリカの政治・経済に影響を及ぼす重大ニュースにいち早く接することであろう。

だからこそ，彼らは電線を往来する情報によって，グールドという人間がこれまで重ねてきた悪行の数々を熟知していたはずだ。たとえば，1869年９月24日，ユリシーズ・グラント大統領をはじめとする政府閣僚を巻き込み，金の大暴落をもたらした空前のスキャンダル事件「暗黒の金曜日（Black Friday）」の首謀者が誰であったのか，ということを[38)]。

かたやグールドには，労働者の団結など笑止千万，たんに「叩き潰す」対象でしかなく，労働組合など無用どころか有害な代物にほかならない。彼こそは金ぴか時代[39)]が生み落した制御不能の怪物であり，その支配下で電信士の給与水準や労働条件の悪化には歯止めが掛からなかった。

IV　WU と電信士の闘争の帰結

それでは，ときに中産層を気取り，ときに「余人を以て代え難い技能者」という自負を抱く電信士は，ＷＵの労務支配と労働強化にどのようなかたちで対抗したのであろうか？三回にわたる大規模争議の推移をとりあげ，ＷＵの労使秩序が経営側の絶対的優位を基調に再編される過程をフォローしよう。

⑴　戦闘的労組によるストライキ

軍隊型の厳格な就業規則が施行され，給与削減と労働強化も断行されるなか，電信士は1868年に戦闘的色彩の濃い労働組合を結成する。「巨大な資本の集積体の攻撃に対する防波堤」たることを宣言した，その名も電信士防衛連盟（Telegraphers Protective League：以下，ＴＰＬ）。先行組織のＮＴＵが労使協調的な性格をもつ互助組織であったのに対して，ＴＰＬは電信士の経済的地位を引きあげ，余裕のある生活状態を維持しようと，企業権力に真っ向から対抗する[40)]。

1869年10月25日，電信産業史上初の本格的な労働争議が勃発した。フランクリン電信会社の電信士たちが賃上げを要求し，３日間のストライキに入ったのである。同社はまず女性電信士に職場復帰を促すものの，彼女たちは男性電信士とともに職場放棄を続行，最終的に電信士全員の賃上げが実現し，労働側は幸先良く緒戦を制した。

翌年１月，ＷＵサンフランシスコ局に勤務する男性電信士４人が賃金削減を不服として職場を放棄，うちひとりが組合員だったことからＴＰＬはこの係争に介入し，１月３日にサンフランシスコで大規模な支援ストライキを敢行。それは瞬く間にニューヨーク，シカゴ，アトランタ，ワシントンに飛び火したが，『シカゴ・トリビューン』は「電信士たちは男性も女性も同じ大義を奉じて仕事を放棄し，同じ組織に属して，同じ規律に準じている」と報道している。

けれども，ＷＵは鉄道駅を渡り歩く電信士を駆り集めて大規模なスト破りチームを編成，争議中の各局に送り込み，業務を滞りなく遂行させた。１月18日，電信士が試みた最初の全国争議は敗北で幕を閉じた。「巨大な資本の集積体の攻撃」は余りにも強く，それをまともに浴びたＴＰＬは1872年に事実上消滅の憂き目を見たのである[41)]。

その後，さきに紹介したイノヴェーションを軸に労働強化が一段と深刻化するなか，1882年３月にペンシルヴァニア州ピッツバーグの電信士ジョン・キャンベルの呼びかけで，アメリカおよびカナダで活動する多数の地方基盤の労働結社が電信士友愛会（Brotherhood of Telegraphers：以下ＢＯＴ）を結成する。

翌年３月，ＢＯＴはクリーヴランド州シカゴにおいて秘密裏に総会を開き，そこでＷＵとの交渉戦略を協議したうえで，要求一覧を同社経営陣へ提出し，これが通らぬ場合にはストライキを敢行する旨決定。７月16日，ＢＯＴ執行委員会は，ＷＵを筆頭に，ミューチュアル・ユニオン電信会社，アメリカン・ディストリクト電信会社，カナダ・グレートノーザン電信会社に対して，日曜労働の廃止，日勤８時間・夜勤７時間体制の実施，男女同一労働同一賃金の実現，架線工と鉄道電信士の労働条件の改善，一律15パーセントの賃上げを盛り込んだ要求書を提出した[42)]。

これを受け取ったＷＵ総支配人エッカートは，ＢＯＴを「傲慢で無礼な輩の集まり」と決め付け，「奴らなどＷＵ従業員の代表とはいえない」として要求を一蹴する[43)]。７月19日正午を期して，全国8,000人に及ぶ電信士が一斉に職場放棄した。ストライキは都市部の主局から地方の支局へと拡大，やがてボルチモア・アンド・オハイオ鉄道やペンシルヴァニア鉄道に勤務する電信士も多数加わる[44)]。

けれども，ＷＵは強硬姿勢をいっこうに崩さなかった。南北戦争中の軍務以来エッカートの腹心を務めてきた同社シカゴ局支配人ロバート・クローリーは，「1870年争議と較べれば，今回のものは多寡が知れている。当時は局長も電信士も揃って職場放棄したが，今回は管理職や主任電信士はきちんと局に居残っている」と『シカゴ・トリビューン』記者に語った[45)]。彼の言葉どおり，各地のＷＵ管轄局は若干の業務の滞りを余儀なくされつつも，主要都市の各局は営業中を「装う」のに十分な電信士を配置していた。

特筆すべきは，このような強硬姿勢を貫く裏で，ＷＵが世論に対する慎重な気配りを怠らなかった事実であろう。

実業家は莫大な利益につながる情報の迅速なやりとりに，また，新聞記者やジャーナリストは極秘情報の入手や記事の送信に，一般の人びとは緊急の要件を親戚や知人に知らせるのに同社の回線を利用する。ＷＵ経営陣は法人か私人かを問わず顧客に対して適正な価格で納得のいくサービスを提供するよう心掛けた[46)]。無論，これが電信士に対する労働強化

と人件費の削減によって実現されたことはいうまでもない。

　また，1877年には，ワシントン海軍天文台の時報を受けて１日１回局地時の正午を知らせる報時球がニューヨーク・シティ本社の塔に設置されている。海軍天文学者Ｅ・Ｓ・ホールデンは，「ニューヨーク市民の生活と海運にとって，ＷＵの措置は公共精神に富む」と賞賛している[47)]。

　８月15日，闘争資金が底を衝いたＢＯＴ執行委員会はエッカートに協議を申し入れたものの，にべもなく拒絶された。８月17日，ストライキは正式に解除されて，争議はＢＯＴの敗北で幕を閉じる。復職を望む電信士は忠誠誓約書（yellow-dog contract）に署名せねばならず，好戦的な活動家と目された電信士は男女を問わず要注意人物名簿（blacklist）に氏名を掲載された。

　この争議終結後，連邦議会から今回のストライキに関する見解を求められたグールドは，些かも悪びれることなく，「我がＷＵほど従業員思いの大企業はなく，電信士は申し分のない賃金を支給され，ストライキに加担したのは最も貧困な連中にすぎません」と断言する。そして，「我が最高の従業員たちは何時間働こうがいっこうに気にしない。彼らは常に精進し，事業の発展を自分の事のように思い，より高い地位に昇ることを日夜求めているのです」と朗らかに付け加えた[48)]。

　1870年と1883年の争議敗北で甚大な打撃を被った電信士の労働運動は，しばし立ち直りのきっかけを掴めず，雌伏の時期をすごす。ようやく1902年，全米電信士労組（Commercial Telegraphers Union of America : CTUA）が結成され，アメリカ労働運動の中核であるアメリカ労働総同盟（American Federation of Labor : 以下，ＡＦＬ）の傘下に入った。サミュエル・スモール議長のリーダーシップのもとで，1904年には１万人の組合員を擁したCTUA の目標は，ＷＵとの正式な交渉ルートの確立であった[49)]。

　ＷＵはしかし，CTUA の存在など歯牙にもかけず，一貫して反労組主義（anti-unionism）を堅持し，厳格な職場規律と回線傍受体制の徹底を軸に，賃金削減，長時間労働，劣悪な労働条件を電信士に押し付ける。このような強権的労務支配への不平や不満が爆発寸前となっていた1907年４月，ニューヨーク・シティ本局に勤務するふたりの CTUA 組合員が照明の不備など作業環境の悪化に抗議した。局長Ｔ・ブレンナンは「労組のアジテーターなど本局に必要ない」とただちにふたりを解雇処分とする[50)]。

　ちなみに，この時期，ニューヨークに次ぐ全米第二の巨大都市シカゴでも，電信士の労働時間は１日10時間で週６日の勤務，頻繁な日曜出勤も課せられ，電信室は往々にして手元が暗く，換気も決して良好とはいえなかった。あまつさえ当時の電信士の給与額は１ヵ月当り25～82.5ドルと等級や地域によって大きな格差があり，1880年代以降の物価高

騰による労働者全体の購買力の低下にもかかわらず，横ばいが続いて実質的にも名目的にも1860年代の水準を下回っている。[51)]

CTUA はふたりの組合員の解雇を受けて，ただちに苦情一覧を作成，WU社長となっていたR・クローリーに提出した。5月には同社サンフランシスコ管区の電信士たちが前年のサンフランシスコ大地震の影響で高騰した生活費の補填を求めて25パーセントの一時的賃上げを要求。間髪入れずにCTUA 執行委員会は，WUがサンフランシスコ管区電信士の要求を拒絶した場合，ストライキを実施すると決定した。[52)]

地震被害からの復興もいまだ途上にあり，長距離通信網の途絶を危惧した連邦政府は，労働省調査委員チャールズ・ニールをCTUA とWUの仲裁役として派遣，労使交渉の実現をはかった。サンフランシスコ管区責任者が断固たる拒絶でこれに応えた結果，スモール議長は6月21日にストライキを指令する。オークランドで働く約200人の電信士，150人のWU管轄局従業員，50人のポスタル電信会社従業員が一斉に持ち場を離れた。[53)]

「これは地方レベルの山猫ストライキではなく，電信サービスを混乱させてWUから譲歩を引き出そうとの意図で統率された，全国規模の闘争戦略の一環である」というのが新聞各紙の見解であった。8月11日にはAP通信社勤務の電信士も賃上げを求めて職場放棄し，やがて1万～1万5,000人の電信士が続々とストライキに突入していく。[54)]

だが，WUは今回も大量のスト破りを武器として持久戦を仕掛け，CTUA の疲弊を待つ。そのもくろみどおり，8月下旬になると，CTUA 内部で早くもストライキ資金の不足が懸念され始めた。スモール議長はAFLやその他の連携組織に支援を求めたが成果はなく，執行部員のあいだでは次第にその指導力を疑問視する声も囁かれる。[55)]

10月12日，万策尽きたスモールはストライキ終結を要請する電文を執行委員会に打電，執行委員会はその弱腰な姿勢を非難し，彼を停職処分とした。折しも10月14～16日に一部投資家による株価操作の失敗から大手信託会社ニッカーボッカー・トラストを巻き込んだ金融恐慌が発生，各地の主だった金融機関には預金を引き出そうとする長蛇の列ができる。生活不安に駆られた電信士のなかには，ストライキの先行きに見切りをつけて鉄道駅に職を求めたり，WUに復職したりする者も現れた。[56)]

結局，11月9日にストライキは正式解除となるが，WUは今回もまた電信士に全く譲歩しなかった。「敵のみを見て，己を省みなかった」ことは，電信士側の最も重要な敗因と考えられる。彼らはWUの如き巨大企業の従業員として近代的な人事管理組織に組み込まれた後も，最先端テクノロジーを操る職人（craftsman）としての，そして中産層の一員としての矜持を捨てられずにいた。

かようなエリート意識は，敵であるWUには全く通じなかったが，皮肉にも本来味方と

考えるべき歴然たるブルーカラー職種の労働者には近寄り難いオーラとして作用する。実際，電信局に雇われる架線工，修理工，土木労働者，配管工，ボイラー工は，それぞれ独自の職種別労組（craft union）に組織されていた。電信柱によじ登ったり，感電や爆発の危険をともなう作業をこなしたりする彼らには，電信士の紳士淑女然とした服装や態度がときに鼻もちならなかった。そして，中産層の一員を気取る電信士のライフ・スタイルにも違和を覚える[57)]。

要するに，ブルーカラー職種に従事する人びとの眼には，電信士が「職人気質の濃厚な分，他人に雇われて生活の糧を得る賃労働者としての意識がすこぶる薄い存在」と映ったわけだ。CTUA がナショナル・センターのＡＦＬから十分な支援を引き出せなかったのは，ともすればストライキを「肉体労働者に特有の野蛮な戦術」と蔑むメンタリティにも由来する。それではストライキを闘い抜くことなど到底叶わぬ話といえよう。

くわえて，電信士のなかからはカーネギーやエジソンといった「立志伝中の人物」，あるいはエッカートやクローリーなどＷＵ経営陣が輩出している。「あの連中も元はといえば自分たちと同じではないか」という思いは，ブルーカラー労働者よりも経営側に対するシンパシーを電信士に抱かせる一因となった。実際，ＷＵ管轄局には，先述した昇進・昇給経路も存在しており，電信局長に昇り詰める者もいたのである。

あまつさえ，争議が敗北に終わるたびに，ＷＵ管轄局から鉄道管制局への大脱出が発生している。ＷＵに睨まれたところで，地方の鉄道駅に流れれば「食うには困らない」という現実も，電信士の闘争に臨む覚悟を甘いものとした。

大規模争議を闘い抜く財源の絶対的不足，巨大企業のもつ資金力への過小評価，スト破りの宝庫となった渡り電信士の存在　――　過去の苦い教訓に対する取り組みをほとんど為さぬまま，CTUA に集った電信士たちは風車に挑むドン・キホーテよろしく，ただ決起したのである。

⑵　技術革新と労使秩序の再編

1907年争議の敗北から２年後，意外な出来事によって電信士の労働条件が改善された。1909年11月16日，アメリカ電話電信会社（American Telephone & Telegraph Company：以下，ＡＴ＆Ｔ）が，グールドの遺族からＷＵ全株式の30パーセントにあたる30万株を買い取り，同社の支配権を手中に収める[58)]。

この買収劇を演出したのが，「通信業界のナポレオン」ことセオドア・ヴェイル。モールスとともに電信開発に尽力したアルフレッド・ヴェイルの甥にあたり，一介の電信士から身を起して，このときＡＴ＆Ｔ社長の座にあった。後発の電話事業が老舗の電信事業を

呑み込んだこの事件は，電気通信業界の勢力図が塗り替えられつつあることを象徴した。

その渦中にあって，電信士の運命にも変化が生じる。合併から１年を経た1910年11月23日，ヴェイルはＷＵ社長職を兼任するが，自身のキャリアの原点も忘れてはいなかった。彼はただちに電信士の給与を改善し，すでにＡＴ＆Ｔで実施されていた疾病・老齢年金制度の対象に電信士も含める。それとともに，電信局の作業環境を衛生的かつ健全な状態に保つことを発表した。[59)]

むろんヴェイルとて企業経営者，損得の勘定はしっかりとわきまえている。ＷＵが保有する電線路の範囲は当時比類がなかった。そこで，彼はＡＴ＆Ｔの顧客に対して「電話一本で電報が申し込めます」と宣伝する。「わざわざ電信局にいかなくても済む」と顧客には好評であった。これによって，長距離電報の需要が従来よりも増える。また，顧客にすれば，「近距離の至急通信は電話で，長距離の重要通信は電信で」という仕儀になる。「通信サービスとしての互いの利点を活かしあえばいいではないか」とヴェイルは考えた。

この偉大な現実主義者のお陰で，電信士は莫大な利潤の配分にあずかる。1909年にニューヨーク・シティの労働者家庭を対象として実施された調査によると，年収1,000～1,200ドルの家庭は労働者階級ではなく，中産層下辺に属するとされた。ヴェイルによる賃金改定のお陰で，名実ともに中産層の仲間入りをはたす電信士が増加していく。[60)]

しかし，通信業界における電信と電話の密月は束の間に終わった。州際通商委員会（Interstate Commerce Commission）が独占禁止法違反の疑いでＡＴ＆Ｔに対する審査を開始したのだ。これを受けて，1913年12月19日，ＡＴ＆Ｔは保有するＷＵ株式を売却し，その管理運営から撤退することをジェームズ・マクレイノルド司法長官に確約する。[61)]

かくして，「電信士の介添えを必要としない」[62)]通信手段＝電話は，電信事業にとってだけでなく，電信サービスの担い手である電信士の運命にとっても，大きな脅威として対峙することとなった。

だが，脅威となったのは，ひとり電話だけではない。電信の現場でも，新たなイノヴェーションが登場した。それは電信士の仕事道具であり，技能の拠り所ともなってきた電鍵において起こる。

手首と肘の微妙な動作で短符と長符を打ち分ける伝統的な電鍵にかわって，タイプライターの鍵盤を援用した新型送信機が1910年代半ばから電信の現場に導入されたのだ。モールス符号の知識や，打電・解読技能がない者でも，タイプライター型電鍵をもちいれば平文の送信をアルファベットや数字を記したキータッチによって行え，驚異的な速度で送信できた。

伝統的な電鍵を使用した際の送信速度は，ＷＵニューヨーク・シティ本局に勤務する平

均的な電信士で１時間当たりほぼ60件。だが，同局勤務のリリアン・ワーゲンハウザーという女性は，タイプライター型電鍵を叩いて，１時間に173件の文書を送信するという記録を樹立した。同年，タイプライター型電鍵の導入によって失職したベテラン電信士は，この新装置を「能率的な機械に姿を変えた疫病神」と憎しみを込めて呼んでいる[63)]。

1919年，印刷電信機メーカーのモーグラム社［1907年にジョイ・モートンとチャールズ・グラムが創立］は，送受信機一体型の電信機《テレタイプ》を開発した。爾来，これがタイプライター型電鍵の代名詞となる。

ＷＵはこのテレタイプの本格的な導入をめざして，ニューヨーク・シティ24番地ウォーカー・ストリートの同社運用本部の一画に，テレタイプ・オペレーター養成所を開設した。入学者にはキータッチと印字機の操作をはじめとして，アメリカ地理や人名・地名の正しい表記などが指導されている[64)]。

旧式のモールス電信技能よりも短い期間で習得可能なテレタイプ操作に惹かれたのは，ワーキング・ウーマンとしての自立をめざす若い女性たち。「タイプライターを打てれば，オフィスワークだけでなく，電信の現場でも働くことができる」というのが，彼女たちの目算であった。テレタイプの開発と普及は，女性の職域を拡げていく。

ＷＵの養成所を卒業し，電信局での見習い期間を経た女性たちは，電文の送受速度で電信士をはるかに凌ぎ，しかも格段に安い賃金で雇える労働力として，その数を急速に増やした。全米の電信士数は1890年に５万２千人，1900年に５万６千人と10年間でほぼ横ばいであったが，1910年には６万６千人，さらに1920年になると７万５千人へと急増を遂げる。タイプライター型電鍵の導入による女性オペレーターの増加が，この数値に大きくかかわっていると推察できよう。

伝統的な電鍵をもちいるモールス電信士の時代に幕を引いたのは，1929年10月24日に発生したウォール街の株価暴落。それに続いて未曽有の長期不況が訪れると，ＷＵや報道関係事業は，大幅な経費削減をめざして電信士を大量に整理する。かわって配属されたのが，女性を主力とするテレタイプ・オペレーターであった。

1848年２月に創業間もない電信を利用してアメリカ＝メキシコ戦争の終結をスクープしたＡＰ通信は，1934年７月26日，最後のモールス電信士の解雇を発表している。「これで『真鍮叩き（brass pounder)』はニューヨーク州のＡＰ通信の報道網から全て姿を消した。今日，ナイアガラ瀑布からニューヨーク・シティにかけて，モールス電信士はひとりも働いておらず，自動印字機の採用によって最後のモールス回線も排除された」と[65)]。

電信士たちのなかには，いまだ旧式電鍵が羽振りを利かせる鉄道業へと居場所を求める者もいた。列車運行の管制電信では簡潔な指令文の送受を旨とするために，わざわざテレ

タイプを導入する必要がなかったからだ。また，無線通信の開発により，電信が海上交通の安全性を高めるために利用されると，そこに活躍の場を求める者もいた。

ＷＵの支配下に置かれた電信産業の労使秩序は，徹底した反労組主義とそれにもとづいて実施される強権的な労務支配策，そして電信士を「知的な専門職」たらしめていたモールス符号の打電・解読技能を不要化するイノヴェーションの導入を軸に，1910年代以降，経営の絶対的優位を基調とする安定化を実現したのである。

総括と展望

思えば，19世紀から20世紀にかけてグローバル経済の主流を形成した工業労働に対して，20世紀末以降になると非物質的労働が次第に主流を占め始めた。これは知識や情報，コミュニケーションといった無形の生産物を作り出す労働にほかならない。200年以上前に，あらゆる労働形態と社会全体が工業化への順応を強いられたのと同じく，今日の労働と社会は情報化を強いられ，知識やコミュニケーションを重視する傾向を強めている[66]。

本稿でとりあげたＷＵの事例は，情報通信産業の経営と労働が展開した相剋の軌跡における最初の一齣であるが，上記の事情に照らしあわせるなら，モールス電鍵の如く博物館に陳列されるだけの遺物では決してない。

改めて確認すると，独占資本＝ＷＵが電信業界に君臨するなかで，専門技能職者＝電信士の境遇は悪化の一途を辿った。作業規律を保つための監視体制はじつに厳格であり，監督による頻繁な回線傍受は電信士の緊張を極度に高める。電信士のなかには，精神的プレッシャーの蓄積や手首や肘の酷使に耐えられず，飲酒によってこれらの苦痛を紛らわせるうちに重度の依存症に陥る者も多数現れた[67]。

電信士たちはしかし，自らの境遇を無抵抗に甘受したわけではない。1870年，1883年，そして1907年と三度にわたり，彼らは労働組合を結成してＷＵに挑んだ。それはときにジェイ・グールドのような魔物に支配されていることもあった。

いずれの闘いでも電信士は一敗地にまみれ，独占資本のもつ絶大な力と自身の無力さを痛感させられた。惨めな敗北のあと，要注意人物名簿に名前を記載され，独立系電信会社が細々と営む僻地の小さな電信取扱所や鉄道駅を転々とせざるをえなかった電信士もいる。

だが，敗北は，闘いの結果として在る。闘うからこそ，敗北も勝利も生まれるのだ。逆に，闘いなきところに敗北も勝利も存在しない。そこに在るのは，ただ現状への追従にすぎない。

専門技能者に特有のエリート意識や一匹狼的な姿勢を捨て切れなかったことは，電信士にとって最大の敗因には違いない。これはまさに獅子身中の虫ともいうべきものであり，

電信士たちはいずれの機会にもこれを克服することができなかった。そこから「敵のみを見て，己を省みなかった」と後世が電信士を批判することはたやすいが，大切なのは，電信士の闘いが我々に語りかけるなにごとかに耳を傾けることではないか。

権利を侵されそうになったとき，いたずらに沈黙を守り，意味不明な笑いを浮かべながら，自己の能力に対する過信と孤高に酔うニヒリズムは，人間としての尊厳に欠けるだけではない。かような態度は，さらなる侮りを招いて，抜け出せぬ苦境へと自らを追い込むことにもつながる。

電信士たちはそれを拒み，職業人としての誇りを守るべく団結し決起した。そして，敗北した　――　いってみれば，ただそれだけのことである。にもかかわらず，その拙い戦いぶりには，ある種のまばゆさも感じずにはいられない。

現在，情報通信労働の現場で働く人びと[68)]は，規制緩和によって苛酷さを増した競争環境のなかで，テクノストレスという言葉に象徴される苦悩を日々強いられている。「使い捨て」という言葉も投げ掛けられる彼らの眼には，電信士たちが１世紀も前に繰り広げた闘いが，はたしていかなる意味をもって映るのであろうか。

「集権的管理体制を構築し，反労組主義を標榜する独占資本」対「賃労働者意識が希薄な分，エリート意識の強い知的専門技能職者」　――　戦いの教訓は後者において苦く厳しいものではあるが，そこから未来を照らす希望の光を見出すことも，それ自体がやはり権利を守る闘いのひとつにほかなるまい。そして，また，これを事実によって今日の生の現場へと訴えることこそ，歴史の水脈を探る営みのささやかな意義でもある。

注

1）筆者はすでにアメリカ電話産業の労務管理・労使関係を以下の著作にまとめている。『ATT労務管理史論　「近代化」の事例分析』ミネルヴァ書房，1991年；『AT ＆ T 創った人びと　企業労務のイノベーション』日本経済評論社，1994年；『電話時代を拓いた女たち　交換手のアメリカ史』日本経済評論社，1996年。また，モールス電信士については以下の著作がある。『ドレスを着た電信士マ・カイリー』朱鳥社，2009年；『モールス電信士のアメリカ史（仮題）』日本経済評論社，2011年刊行予定。

2）本来，“telegraph” は，1793年にフランス人クロード・シャップが発明した腕木伝信を意味した。これは三本の巨大な腕木を様々な形に動かし，その各々に「符号」としての意味を与え，情報をリレー式に目的地まで送る視覚通信方式である。そこに込められた「オリジナル情報の符号化」という発想を，電気エネルギーの実用化と結合させて生み出されたのが「電信」ということになろう。

3）これを「自然独占（natural monopoly）」と呼ぶ。

4）典型的には機械製造，鉄鋼，自動車，食肉加工など。

5）佐藤卓巳『メディア社会　現代を読み解く視点』（岩波新書）2006年，217～218頁参照。
6）Robert Thompson, *Wiring a Continent : The History of the Telegraph Industry in the United States, 1832-1866*［1947］Princeton University Press, p. 10.
7）短符と長符の組み合せからなるモールス符号は，「連続的な値（アナログ）」ではなく，「離散した値（デジタル）」であり，その交換過程には人間による符号化・復号化が介在するものの，まがうかたなきデジタル通信方式の《元祖》にほかならない。
8）モールスによる電信創業から150余年を経た1993年12月21日，情報スーパーハイウェイ構想を打ち出したビル・クリントン政権の副大統領アル・ゴア・ジュニアは，「かつて新たな通信の幕開けとなった電信事業は民間の力で始まった」と述べて，旺盛な民間投資を呼び掛けている（アル・ゴア・ジュニア他著／浜野保樹監修・門馬淳子訳『情報スーパーハイウェイ』［1994年］電通，165頁）。
9）1846年に認可されたハウスの特許は，紙テープに元文書を直接印刷する方式であった。これは1848年認可のアレクサンダー・ベインの化学電信の特許とともに，ファクシミリ開発の基礎となった。
10）Robert Thompson［1947］pp. 241-242.
11）連邦陸軍電信隊については，David H. Bates, *Lincoln in the Telegraph Office : Recollection of the United States Military Telegraph Corps during the Civil War*［1939］D. Appleton-Century Company ; William R. Plum, *The Military Telegraph during the Civil War in the United States, Vol. 1-2*［1882］Jansen, McClurg ; Donald E. Markle, *The Telegraph Goes to War : The Personal Diary of David Homer Bates, Lincoln's Telegraph Operator*［2003］Edmonston Publishing, Inc ; Tom Wheeler, *MR. Lincoln's T-Mail : The Untold Story of How Abraham Lincoln Used The Telegraph To Win the Civil War*［2006］Harper Collins を参照。
12）ＷＵによる電信業界の統合過程については，Robert Thompson［1947］p. 422.
13）1851年，エリー鉄道支配人チャールズ・マイノットは，数千キロメートル範囲に分散する業務を一元的に管理すべく電信の援用を取締役会に提案，単一本部から列車運行を逐一監視して厳密に時間調整できるシステムを構築している。
14）"It's a Lost Art : Farron Atkins Experiences as a Railroard Telegrapher," *Bittersweet*, 9-1［Fall 1981］p. 58.
15）アンドルー・カーネギー著／坂西志保訳『カーネギー自伝』中公文庫版，2002年，70頁。
16）Thomas C. Jepsen, *My Sisters Telegraphic : Women in the Telegraph Office 1846-1950*［2000］Ohio University Press, p. 46.
17）坂西訳『カーネギー自伝』84頁。
18）Edwin Gabler, *The American Telegrapher : A Social History, 1860-1900*［1988］Rutgers University Press, pp. 45-47, 61, 69.
19）Alfred D. Chandler, Jr, *The Visible Hand : Managerial Revolution in America Business*［1977］Harvard University Press, p. 198.
20）*Western Union Telegraph Company, Roles, and Regulations, 1866*［Western Union Collection, Archives Center, National Museum of American History］pp. 23-33.

21）Edwin Gabler［1988］ pp. 54-55. この回線傍受方式は，後発の電話事業における通話交換業務においても実施されることとなる（松田裕之『電話時代を拓いた女たち』109～114頁）。
22）Charles Buckingham, “The Telegraph of To-Day” *Scribner's Magazine*, 6-1［July 1889］pp. 5-8, 13, 17.
23）Edwin Gabler［1988］pp. 36, 101.
24）Thomas Jepsen［2000］pp. 19-26.
25）Edwin Gabler［1988］pp. 40, 47.
26）Frank Dyer & Thomas Martin, *Edison : His Life and Inventions*, Harper & Brothers Publishers, 1910, pp. 24-169.
27）Thomas Jepsen［2000］pp. 12-16 ; Edwin Gabler［1988］pp. 48-50.
28）Robert Thompson［1947］p. 388.
29）Robert Thompson［1947］p. 389.
30）William R. Plum［1882］vol. 2, pp. 113-115.
31）Vidkunn Ulriksson, *The Telegraphers : Their Craft and Their Unions*［1953］Public Affairs Press, p. 17.
32）James Reid, *The Telegraph in American and Morse Memorial*［1886］John Polhemus Publishers, pp. 390-391.
33）1873年９月18日，ノーザン・パシフィック鉄道の経営不振により，同社に投資していたジェイ・クック商会が倒産。国債を独占的に引き受けていたことから，ウォール街は金融パニックに陥り，証券取引所は10日間の閉鎖を余儀なくされた。
34）名和小太郎『起業家エジソン　知的財産・システム・市場開発』（朝日選書）2001年，朝日新聞社，46～47頁。
35）名和小太郎『前掲書』48～50頁。
36）Thomas Jepsen［2000］p. 156.
37）James Reid［1886］pp. 577-591.
38）「暗黒の金曜日」については，飯塚英一『若き日のアメリカの肖像　トウェイン，カーネギー，エジソンの生きた時代』彩流社，2010年，68～71頁参照。
39）原語は “Gilded Age”。マーク・トウェインが友人チャールズ・ウォーナーとの共同執筆で1873年に発表した長編小説の題名にちなむ。南北戦争後の経済優先の世相を描いた。
40）Vidkunn Ulriksson［1953］pp. 20-21.
41）Vidkunn Ulriksson［1953］pp. 23-28.
42）Vidkunn Ulriksson［1953］p. 33.
46）Edwin Gabler［1988］pp. 6-7.
44）45）Vidkunn Ulriksson［1953］pp. 35-36.
46）ＷＵの設定した電信料金（10語当たり）は，ニューヨーク＝シカゴ間で，1866年に1.85ドル，1870年に１ドル，1875年に0.25ドル，1877年に0.5ドルであった。ヨーロッパの平均電信料金の約２倍ともいわれたが，アメリカがヨーロッパよりも物価水準が全般的に高かったことを勘案すると，リーズナブルな料金設定であったと思われる。

47）マイケル・オマリー著／高島平吾訳『時計と人間　アメリカの時間の歴史』1994年，晶文社，102～104頁。
48）James Reid［1886］p. 712.
49）Vidkunn Ulriksson［1953］pp. 59-61.
50）Vidkunn Ulriksson［1953］pp. 70-71.
51）Vidkunn Ulriksson［1953］p. 72.
52）Vidkunn Ulriksson［1953］p. 73.
53）Thomas Jepsen［1997］pp. 40-41.
54）Thomas Jepsen［2000］p. 169.
55）Vidkunn Ulriksson［1953］p. 83.
56）Thomas Jepsen［2000］p. 179.
57）Edwin Gabler［1988］p. 189.
58）John Brooks, *Telephone : The First Hundred Years*［1975］Harper & Row, pp. 133-134.
59）Albert B. Paine, *In One Man's Life : Being Chapters from the Personal and Business Career of Theodore N. Vail*［1921］Harper & Brothers, pp. 245-250.
60）エイレン・S・エイベルソン著／椎名美智・吉田俊実訳『淑女が盗みにはしるとき　ヴィクトリア朝期アメリカのデパートと中流階級の万引き』1992年，国文社，41頁。
61）松田裕之『AT & T を創った人びと』5, 29頁。
62）1877年版ベル電話会社広告では，「電信士の介添えを必要としないこと」が電話のメリットとして強調されている（Tom Standage, *The Victorian Internet : The Remarkable Story of the Telegraph and the Nineteenth Century's On-line Pioneers*［1998］Walker Publishing Company, pp. 198-199）。
63）Thomas Jepsen［2000］pp. 33-34.
64）Thomas Jepsen［2000］p. 49.
65）Thomas Jepsen［2000］p. 193.
66）アントニオ・ネグリ＆マイケル・ハート／幾島幸子訳『マルチチュード　〈帝国〉時代の戦争と民主主義』（上・下）日本放送出版協会，2005年参照。
67）酒井和夫・立川秀樹『IT エンジニアの「心の病」　技術者がとりつかれやすい30の疾患』2005年，毎日コミュニケーションズ参照。
68）典型的には，プログラマーやシステム・エンジニアやキーパンチャーなど，データの入力・検索・照合，文書・画像の作成・編集・修正，プログラミングやシステム管理などに従事する技能職者である。